

## 図書 紹介

感染症は世界の歴史を動かす

岡田晴恵（国立感染症研究所） / 発売元：㈱筑摩書房 /

〒111-8755 東京都台東区蔵前2-5-3 / 048-651-0053（同社サービスセンター） /

A 6 版 / 266頁 / 価格 820円（税別） / 2006年 2月10日発行

鳥インフルエンザウイルス(H5N1)の感染による死者が100人を越えた。鳥インフルエンザから新型インフルエンザという人の病気の出現が危惧され、連日のような報道されている。しかし、人から人への感染伝播は確認されておらず、依然として鳥型であるが、鳥ウイルスからヒト型ウイルスへの変質が間近に迫っている。

本書ではハンセン病、ペスト、梅毒、結核、インフルエンザと時代を追って現れる特有の感染症を取り上げ、歴史からなにがしを学びとり、自衛、防御する手段を模索できないかとの思いから書かれている。

その内容は次の5章から構成され、第1～6章は感染症の歴史を取り上げ、第7章では21世紀の疾病である新型インフルエンザへの対応や危機管理について言及している。

第1章 聖書に描かれた感染症

第2章 「黒斑病」はくり返す？

第3章 ルネッサンスが梅毒を生んだ

第4章 公衆衛生の誕生

第5章 産業革命と結核

第6章 新型インフルエンザの脅威

第7章 21世紀の疾病

次に主なサブタイトルを記すと第1章では中世のハンセン病、十字軍とハンセン病、ハンセン病の道、イエスの治療と教会のハンセン病対策など、第2章ではフィレンツェを襲ったペスト、ペストという伝染病、腺ペストと肺ペスト、ペストロード、黒死病の街、ペストの薬、ペストのお守り、ペスト医という職業、ペストの治療、ペストを祈る教会、黒死病の影響など、第3章では梅毒という病、梅毒の進行、コロンブスの持ちかえった風土病、水銀療法、梅毒の芸術家、梅毒の解明、ネオサルバルサンを発見した日本人など、第4章では検疫のはじまり、保健所の設立と家屋の封じ込め、パスポートの原型など、第5章では古くからあった結核、結核菌とコッホ、ストレプトマイシン、産業革命と結核蔓延、

平均死亡年齢15歳、近代公衆衛生の誕生、下水と飲み水、日本の産業革命と結核、結核大国、予防対策と結核患者数の推移など、第6章では第一次大戦とスペインかぜ、戦争を終結させたスペインかぜ、流行性感冒、インフルエンザの定義、新型インフルエンザ出現のメカニズム、過去の新型インフルエンザ、新型インフルエンザ来襲である。このように歴史をみていくと、ある時代には必ずその時代を特徴づける疾病が存在し、その時を生き残った人にとって自分たちが直面した感染症は逃れない。その感染症の猖獗の果てにあるものは死にあるものは生き残り、命の連鎖が歴史として受け継がれてきた。21世紀を生きるわれわれが直面する感染症は間違いなく「新型インフルエンザ」である。

その第7章ではH5N1型鳥インフルエンザから新型鳥インフルエンザへの危機対応、H5N1型鳥インフルエンザの流行拡大、新型インフルエンザに対する準備、ブッシュ米大統領の新型インフルエンザ政策の衝撃、高病原性新型インフルエンザ出現の可能性、最悪のシナリオで予想される被害、新型インフルエンザ対策の行動計画では、1 医療サービスの提供確保、2 公衆衛生学上の介入、3 抗インフルエンザウイルス薬の使用、4 新型ワクチン政策、5 感染症危機管理、6 情報提供と共有の6項目についての説明がある。

インフルエンザの語源は、18世紀に付けられた病名「寒さの影響 (influenza di freddo)」であるといわれている。日本では862年に激しい咳が出る疫病（咳病）で多数の死者が出たの記録があり、「源氏物語」にも「シハブキヤミ」（咳の出る病）として登場し、藤原定家も「明月記」のなかに書き残されている。江戸時代は風疫、風疾と呼ばれ、「お駒風」（浄瑠璃）、「お七風」（小唄）、「谷風」（力士）などと呼ばれたりもしていた。

細菌やウイルスなどの病原体がその時の政治や社会に与えた影響について私たちの認識はあやふやである。ハンセン病、ペスト、梅毒、結核、スペインかぜなど、人類史を大きく動かした感染症の歴史を知ることが新型インフルエンザの対策に繋がる。本書は冒頭からではなく興味ある章を読んでも理解でき、生命の起源を感染症の歴史を通して学ぶことができる。

（学会事務局）